國學院大學学術情報リポジトリ

見沼における寺社を結ぶ竜神行列：都市近郊の地域信仰と祭り

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-07
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 松井, 真姫子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001597

見沼における寺社を結ぶ竜神行列
―都市近郊の地域信仰と祭り―

Suburban Religious Beliefs and Festivals:
The Dragon King Parade Connecting the Shinto Shrine and the Buddhist Temple in Minuma

松井真姫子

キーワード：竜　竜神　祭　伝承　市町村合併
关键词：龙　龙神　祭祀　传承　市町村合并

要旨

毎年５月４日にさいたま市緑区にある氷川女體神社と国昌寺の間を練り歩く竜神行列が行われる。この行列は神社や寺院が主導して行われているのではなく、熱意による地域住民の有志によって興された祭であることが特徴である。

国昌寺は、江戸時代に開山した曹洞宗の寺院である。この寺の山門には竜の彫り物があり、自然災害をもたらす竜神と信じられていた。

氷川女體神社は、崇神期に創建されたとされる古い神社である。また多くの文化財を所有し、地域の貴重な歴史的資料となっている。この神社は、かつては沼地に面した台地の上に建立されており、沼での神事が約400年続いていた。江戸時代の新田開発事業で沼が干拓され神事が一時中断されたという経緯をもつ。この沼の水神は女神であり、竜神とも関係が深いとされる。

寺社のもつ竜の伝承や地域の伝承に共通性を見出し、新しく生まれる市に向けて興された竜神行列は、国昌寺の山門の竜を解き放し、氷川女體神社の祇園磐船龍神祭りという神事に融合され、竜神まつりとして2000年という年代に市町村合併という行政改革期に興された祭であることに着目し、現代の祭りとして考察する。

摘要

毎年５月４日龙神队伍在埼玉市绿区冰川女体神社和国昌寺之间游行。这队伍的特点是不是由神社和寺庙主主导举办的，而是由热心的社区居民们自发举行。

国昌寺是在江户时代开山的曹洞宗寺庙。在这座寺的山门上有龙的雕刻，人们相信这龙会带来自然灾害。

冰川女体神社是在崇神期创建的古老神社。冰川女体神社拥有很多文化遗产，这些遗产是地域的贵重历史资料。这座神社建造于沼泽地带的台地上。并且在池沼上一直举行大约400年的祭祀。以前，由于受到江户时代的开垦新田，排水开垦沼泽地带的影

响，有过暂时停止神祭仪式的情况。这池沼的水神是女神，跟龙神也有密切关系。
本文注目于神社和地域有关龙神传承的共同性；新成立的市兴办的龙神队伍放弃了国昌寺山门的龙，融合了冰川女体神社的祇园磐船龙神祭祀；市町村合并和行政改革下传承了2000年的龙神祭等方面，龙神祭作为现代的祭祀进行考察研究。

はじめに

さいたま市緑区（旧浦和市）宮本に古くから信仰を集めている氷川女體神社がある。その神社は、毎年５月４日に祇園磐船龍神祭を行う。その祭りは、沼地で行われていたものであったが、江戸時代の干拓事業により一時中断し場所を変えて神事を続け、明治初期に中断されたが、1980年代に再興されたという経緯がある。さらに、市町村合併によって新しい都市（さいたま市）が生まれることをきっかけにして、竜神行列が結成された。竜神行列は、祇園磐船龍神祭の前に緑区大崎にある国昌寺という寺院から、さいたま竜神まつり会という市民団体が竜をかたどったオブジェを担ぎ、さらに宿ふじ会という地元の祭り団体の作った竜と共に、氷川女體神社まで担ぎ手の他に市民を連れて行列を形成して神社まで練り歩く。それが竜神行列と呼ばれて、神社の祇園磐船龍神祭に参加する。発表者は、この一連の行事があたかも一つの祭りの構成となり、竜神まつりとして形成されることに着目し、現代の祭りと伝統のあり方を考察する。

Ⅰ　祭りについて

祭りには、祭儀と祝祭という概念[(1)]がある。祭儀は、筆者は神社の祭祀と深く関係すると考える。神社は、人々の信仰を集め具現化した象徴であり、神が祀られているところである。神霊を迎えもてなし願いを祈ることが祭祀という祭儀である。「まつり」という言葉が、神霊を「まつ」、「まつらふ」ということからきている語源である。もう一方で、祝祭は、集団による非日常的な感覚を味わうもので、狂騒である。

倉林正次は、本居宣長の「マツリ（祭）とは神に仕えまつることである（『古事記伝』巻18）」という説を祭りの定義として一般的であるという見解を示している。[(2)]

薗田稔は、「何か日常生活にない新鮮さと楽しさとを期待して人々が群れ集まり、何らかの形でそれに参加することによって互いに快い興奮と解放感とを味わ

いあうことのできる催しを、われわれ日本人はよく「〇〇祭り」という。それほどに祭はわれわれに身近な文化であり、さまざまな形で再生されている。[3]」として、日本の祭について述べている。また、薗田はリーチ[4]の祭りの構造について祭りの進行を時間的にとらえ、聖なる時と俗なる時の往復運動であり、俗から聖へ聖から俗への過程が祭りに表象される対照的な局面ととらえた概念から、祭儀による表象は形式の強調による俗から聖への強調であり、祝祭による表象は、演技による聖から俗へのコミュニケ―ションといえるとしている。[5]

柳田国男は、「我々の信仰には、教典というものがない。…（省略）その教えはもっぱら行為と感覚とをもって伝達せらるべきものであって…」[6]と日本の信仰を祭り一連の行事を語ることから始めている。祭りに参加することで体験し繰り返すことによって新しく更新されるとしている。祭と祭礼の区別について[7]、「祭礼」は、外国語であって古くから日本にあったわけではなく、一年のうちの大きなまたは評判な祭「大祭」を民間では「祭礼」の意味と用いられている。しかし大祭は元はオオマツリで、今はタイサイと呼ぶのではないか、オマツリは政府領主の貴人がお祭りするから敬語がついてオマツリで、各々で祭るのはマツリと呼んで、紛らわしいので一方のごく少数を祭礼と言い始めたのではないかと柳田は説いているが、新たに祭礼と一般の祭の差別をしなければならない必要があるのかと、問題提起も行っている。本稿において柳田の意味する祭りは、竜神行列であり、祭礼は神社の祇園磐船龍神祭りということになるだろうか。

松平誠は祝祭について、「日常生活の反転、それからの脱却と変身によって、日常的な現実を客観化・対象化し、それによって感性の世界を復活させ、社会的な共感を生み出す共同行為」[8]としている。

本稿において、氷川女體神社の祇園磐船龍神祭に竜神行列が参加することによって形成されるている竜神まつりを、祭儀と祝祭の面から考察し、後述したい。

Ⅱ　氷川女體神社と国昌寺の概略

・氷川女體神社（さいたま市緑区宮本2-17-1）

氷川女體神社は、竜神行列の終点地であり、竜神行列の行われる同日に神社では祇園磐船龍神祭が行われる。崇神天皇期[9]に創建されたといわれている。祭神は、奇稲田姫尊、配祀神に三穂津姫尊、大己貴尊である。氷川女體神社は、多

くの文化財[10]を所有しており、その文化財からこの神社の歴史をたどることができる。中世のころからその地域を統治する武士層の支配者による信仰が厚く、奉納された太刀や教典、発給された文書、建築物からうかがえる。後述する文化財の表中（P.6〔表1〕を参照）の番号を挿入し述べていくと、⑤「北条氏綱制札」は、大永4年（1524）8月26日付で軍勢の濫妨狼藉を禁止したものである。また⑤「北条氏印判状」は、元亀3年（1572）に竹木剪取の禁止や神領に対し異議をはさむことを禁じたものである。また②「三鱗文兵庫鎖太刀」は、長さ約90㎝あり、金具や柄、鍔など太刀全体に北条氏の家紋である三鱗文が施され、また特殊な鎖が用いられるなど特別な作りであることから社寺奉納用の太刀とされる。鎌倉時代のものとされている。④「大般若波羅蜜多経」は、紙本墨書で折本で巻数番号の判明するものが539巻ある。600巻のうちの400巻は川越仙波の無量寿寺の僧性尊によって、正慶2年（1333）から暦応元年（1338）にかけて写経された。当時の河越一族の繁栄を祈願して写経されたものである。また、永禄4年（1561）から6年の間、川越中院の僧脩芸によって岩付太田氏の繁栄のために真読された。当時は、太田氏は北条氏（後北条）と抗戦していたところ、長尾景虎が侵攻してきたことにより窮地に立ち戦闘を繰り広げていた。この戦乱のすさまじさが、この経典の跋文や識語から読み取れるのである。

江戸時代の新田開発前までは、毎年隔年の9月に御船祭という神事が、神社の前に広がる見沼という沼で行われていた。見沼に坐す女神に対して行われる祭りで、船に①神輿を乗せ見沼を渡り祭祀を行うものである。文化財として保存されている神輿は、鎌倉時代末期から南北朝のものとされている。この神輿は、総高106.5㎝でヒノキ材で作られており、全面に黒漆が塗られている。屋根、胴、腰の三つの部分から成り、社寺の浜縁をかたどり、正面に鳥居が配されている。胴の正面は板唐戸となり、その他三方は羽目板となっている。御船祭に使用されているため、轅がない。享保12年（1727）に幕府による干拓工事により沼の水が干上がり、神事が一時中断されたが、水田の跡地に新しい祭祀場を設けて行われることとなった。明治期になるとこの祭祀は廃止された。昭和58年（1983）に祇園磐船龍神祭として再興され、毎年5月4日に行われている。

御船祭に使用されたと思われる祭祀具に、③牡丹文瓶子がある。高さは約33センチで2口1対の画花文褐釉の瓶子である。中世に関東地方の有力な寺社に配られたとされる。

徳川家康が関東入城すると、⑦天正19年（1591）氷川女體神社に社領として50石の寄進し、その次の将軍から継目安堵の御朱印状を発している。50石はこの地域の寺社で最も多いものである。また⑧寛文7年（1667）の棟札には、4代目将軍徳川家綱が忍藩主阿部忠秋に社殿を造営させた記録がみえる。またその棟札には、武蔵国一宮簸川女躰大明神社とある。文化財の⑥古社宝類の中に鋳銅の馬がある。高さ12.3㎝のものであるが、徳川家康の奉納とされ、寄進状と共に受けたものであろうとされる。

氷川女體神社は、創建は古代とされ、文化財より中世には見沼で神事を行っていたことがみえ、時代の統治者により尊崇と厚い保護をされていたことがわかる。祭祀は近世の新田開発までは継続されていた。新田開発により、見沼という祭祀場を失い一時中断したが新たに陸地に祭祀場を設け磐船祭として祭祀を行い、明治期まで継続された。明治初期に社格が一宮から郷宮に統制され、磐船祭も廃止とされた。昭和期に祇園磐船龍神祭りとして再興されたのは、神社の意向だけではなく氏子崇敬者の賛同によるものもある。現代においてもこの地域一帯の厚い信仰を集めているといえる。

・国昌寺（さいたま市緑区大字大崎2378）

国昌寺は、曹洞宗の寺[11]で竜神行列の出発地点である。慶安2年（1649）に徳川家光から寺領十石寄進されたという記録[12]がある。この寺の2代目住職大雲文龍は、書に優れており、時の天皇（後水尾天皇や後陽成天皇）の勅を3度受け大字や歌書を書いたと言われている。文龍は、天文14年（1545）武蔵国足立郡に生まれ、15歳の時に剃髪し、国昌寺の心厳について曹洞宗を身につけ、関東各地の寺を約20年遊歴し、元和3年（1617）に没したという記録がある。⑪書跡「大雲文龍書大弁財尊天号」に、文龍の署名がある。

国昌寺の⑨寺門は、薬医門と呼ばれるものである。欄間に竜の彫刻がある。江戸時代中期、宝暦年間頃の建立とされる。

板石塔婆とは、「中世に造立された扁平な石造塔婆で、頂は三角形を呈し、頭部には二条線を刻み、梵字を組み合わせて作った種子または仏・菩薩の画像、名号、題目等を刻む。そして下半に紀年銘、造立趣旨、偈、光明真言等を刻んでいる。」[13]である。国昌寺の文化財の⑩阿弥陀一尊種子石塔婆は、地上195㎝、上幅47.4㎝、下幅51㎝、厚さ8センチの大型の石塔婆である。銘文は磨滅してい

るため年不詳であり、頭部の二条の線の刻み方や種子の刻み方から、鎌倉時代のものとされる。その他に、宝篋印塔という台石があり、右側面に徳治２年と銘があり鎌倉時代とされる。

古文書[14]では、江戸時代に入ると徳川家光から十石を寄進され、その後将軍家から朱印状が継続して発給されている。万治４年（1661）に、本山常泉寺[15]に違背したことに対して許されたので詫び状をいれている。享保12年（1727）中興の開山である大雲文龍の伝記が書かれている。文政期に入ると文政10年（1827）鳳山が本山惣持寺（神奈川県）の一夜住職に任ぜられた。鳳山の寂した後、後任の僧正覚寺禅峰、衆寮邦雲と任じられている。国昌寺の末寺に守光院（太田窪村）とある。古くは「守綱院」であったが、将軍家の諱（家綱）となるので「綱」を改めて「守光院」としたと縁起[16]にある。

・主な文化財

氷川女體神社と国昌寺には、以下の主な文化財がある。中世からの寺社それぞれの信仰の存在を証明できる。

〔表１〕

氷川女體神社			
①	氷川女體神社神輿	県指定（工芸品）	鎌倉時代末から南北朝時代
②	三鱗文兵庫鎖太刀	県指定（工芸品）	中世
③	牡丹文瓶子	県指定（工芸品）	15世紀
④	大般若波羅蜜多経	県指定（典籍）	中世
⑤	北条氏綱制札・北条氏印判状	市指定（古文書）	中世
⑥	氷川女體神社古社宝類	市指定（工芸品）	中世
⑦	氷川女體神社社領寄進状及び朱印状	市指定（古文書）	天正19年（1591）～
⑧	氷川女體神社社殿棟札	市指定（建造物）	寛文７年（1667）
⑨	氷川女體神社の名越祓	市指定（無形民俗文化財）	
国昌寺			
⑨	山門	市指定（建造物）	江戸中期
⑩	阿弥陀一尊種子板石塔婆（あみだいっそんしゅじいたいしとうば）	〃　（歴史）	鎌倉時代
⑪	大雲文龍書大弁財尊天号（だいべんざいそんてんごう）	〃　（書跡）	江戸初期

Ⅲ　氷川女體神社と国昌寺との関連性

氷川女體神社

ご祭神は、奇稲田姫命尊[17]である。奇稲田姫命尊と素戔嗚尊[18]の二柱の祭神の関係は、記紀神話では素戔嗚尊が奇稲田姫を八岐大蛇から救ったことによって、奇稲田姫が素戔嗚尊の妻となった。八岐大蛇とは、8つの頭をもつ大蛇である。毎年出雲の肥の川にやって来ては足名椎と手名椎の老夫婦の神の娘を人身御供として一人ずつ食べていた。奇稲田姫は最後の一人で、素戔嗚尊は高天原から追放されこの地にやってきて、奇稲田姫の櫛に変え髪にさして襲ってくる八岐大蛇を退治した。

「クシ」は、巫女的象徴である櫛と、霊妙不思議の意の美称であることから、「くしいなだひめ」とは、田の神に仕える巫女であると同時に、稲田の神に昇格したものと考えられる。『日本書紀』神代宝剣出現章の一書を参照にすると蛇神の水神を迎えて行う田祭儀礼があったと思われる。[19]

三鱗文兵庫鎖太刀にみられる三鱗文は、北条氏の使われた家紋である。

国昌寺

現在の山門の屋根は、昭和54年（1980）かや葺き形銅板葺きに改められた。この門の欄間に左甚五郎の竜の彫刻があり、また「開かずの門」の伝承がある。欄間の竜は、もともと見沼に棲んでいる竜で、作物をしばしば荒すので左甚五郎から欄間に釘づけにされたという。葬儀の時、棺桶を担いでその門をくぐると棺桶が軽くなり、竜に食べられたからだという伝説がある。軸物として大雲文龍の書がある。その書家の名前に龍の文字がある。

寺社の竜との関連性をみると蛇や竜に関係するモチーフを寺社にあることがわかる。氷川女體神社の奇稲田姫尊は、記紀神話の要素をもち、見沼という水の神、農耕の神として地域の人々に信仰され、国昌寺においても農耕との竜の関連性がみえる。その神話の蛇や竜のモチーフは、地域に人々の伝承の中に生き語り継がれ、人々の信仰と関連つけられ現代に至っていると考える。現在の氷川女體神社と国昌寺の年間行事からも相互の関係性はないが、5月4日に限り国昌寺が竜神まつりとして行事を入れている。（〔表2〕を参照）

・寺社の年間行事（現在）〔表2〕

	氷川女體神社		国昌寺	
1月	1日	歳旦祭	1日～3日	大般若祈祷
2月	18日	祈年祭	15日	涅槃会
3月			3日	春彼岸
4月			8日	降誕会（花祭り）
5月	4日	祇園磐船龍神祭	4日	竜神まつり
7月	31日	名越大祓い		
8月			13日～15日 18日	盂蘭盆 盂蘭盆施食会
9月			9月	秋彼岸
10月	8日	例大祭	12月8日	成道会
11月	23日	新嘗祭		
12月	25日より	かま〆頒布	12月31日	除夜の鐘

Ⅳ　伝承 (20)

竜にまつわる伝承をみてみることにする。

・見沼地域の竜にまつわる伝承 (21)

竜にまつわる伝承は、この地域に多く伝わっており本稿で取り上げたものは主なものである。伝承の内容を大きく分けると①神社②寺③干拓工事④土地の4つに分類できる。また、見沼田んぼと呼ばれる行政によって緑地化されている地域に多くの伝承がみられる。

氷川女體神社では、「りゅう」の文字を「祇園磐船龍神祭」にみられるように龍の字をあてている。国昌寺では、僧大雲文龍の名前以外、龍の寺の使用がみられず、文化財資料館系の資料の表記では竜を使用しているので、本稿においては竜の字を使用する。

伝承と伝説について、本稿では伝説も含めて伝承として表記する。伝説と表記することもある。

1　神社

①釘付けの竜（緑区大門/愛宕神社）

悪さをする2匹の竜がいるので、日光へ向かう左甚五郎に竜を彫ってもらい大門の愛宕神社に封じ込めた。その竜が夜中に抜け出し田畑を荒すという騒ぎになり、ある村人が甚五郎の彫った竜を釘付けした。

②おしゃもじ様（大宮区天沼／天沼神社）

百日咳で苦しむ子供のいる家に金の竜が現れ、父親に熊野神社にお参りするようにと言う。お参りすると咳はすっかり治まる。

③四本竹と御船祭（緑区下山口新田・宮本・氷川女體神社）

沼の深いところに神輿を乗せた船で行き、四本の竹を立てて祭祀の場所とし赤飯や銭を沼に捧げると、渦を巻いてあっという間に吸い込み、その後で竜神の使いの鯉が箸を吹き戻した。

④弁天様のお使い（南区別所／別所沼弁天・中央区／二度栗山弁天）

別所沼の弁天島で一休みをしている車屋に声をかけた美女は、二度栗山へ頼んだ。二度栗山へ着くとその美女の姿は消えて白蛇が石段を登って行った。二度栗山には竜神様が祀ってある。

⑤お宮弁天（見沼区新右衛門新田／宗像神社）

真蔵という若者と夫婦になることを約束していた新右衛門の娘お宮は、不治の病に陥る。臨終の際に竜神様に見初められてしまったことを打ち明ける。

⑱龍燈（緑区宮本氷川女體神社）

見沼で行う神事の時は必ず御旅所から社頭に毎年２，３度ずつ龍燈があがったという。新田開発の干拓後、少し残った水たまりから龍燈があがることがあったという。その日時は定まっていなかった。

２　寺院

⑥開かずの門・左甚五郎の竜・釘付けの竜（緑区大崎／国昌寺）

田畑を荒す竜がいるというので、日光帰りの左甚五郎に竜を掘ってもらい山門に封じ込めた。葬式の時、山門下を通ると棺桶の中が空になったので、山門を閉ざし開かずの門とした。この竜も釘付にされたという。

⑦長伝寺の水呑み竜（中央区本町／長伝寺）

大雨の降る晩、寺の欄間の竜が消えていなくなる。後を追うと溢れそうな川の水をがぶがぶと飲んで冠水を防いでいた。それでこの地域が冠水しないことがわかった。

３　干拓工事

⑧井沢弥惣兵衛と竜（大宮区天沼／大日堂）

干拓の詰所で病に伏した井沢弥惣兵衛の枕元に、美女が現れた。干拓を拒む美

女は白蛇だった。

⑨竜神の決意（見沼区片柳/万年寺）

井沢弥惣兵衛の干拓詰所に工事の中止を迫る美女側現れた。行燈の灯りに揺れる女の影は竜だった。そこで竜神と弥惣兵衛のやり取りの結果、竜神は沼を人間に預ける決心をする。

⑩竜神灯（見沼区）

見沼が干拓され、竜神が沼を明け渡すと、毎日灯籠に灯を灯しに来る老婆がいる。尋ねると沼の主であったことと、灯を灯し続けることを告げると、白い煙となって天に昇って行った。

4　土地

⑪見沼の笛（見沼全域・見沼区・岩槻区・緑区）

夜な夜な見沼に鳴り響く怪しい笛の音。奏でる主は妖艶な美女だった。その笛の音を追う若者たちは次々と姿をくらましてしまう。

⑫蛍の御殿（見沼地区）

見沼に美しい笛の音が鳴り響き、それをたどると古井戸に着き、その中をのぞくとパッと明るくなり、無数の蛍が舞い出てきた。

⑬美女と馬子（緑区下山田新田/厳島神社）

馬子に乗せてくれと頼む美しい乙女がいた。お礼に小箱をもらい主人に渡すと、その家は大いに栄え、主人が小箱を開けると家は衰退してしまう。開けてはいないという小箱には竜の鱗が入っていた。

⑭蓮を作らない（見沼地区全体）

見沼で蓮を作らないのは、蓮の刺で竜が傷つくことを恐れたから。

⑮御沼の手毬（緑区大牧）

竜のもつ水晶玉は、竜の涙である。竜神が見沼の水藻で作った手毬が乾いて飛んでしまったので流した涙である。

⑯見沼のゴイ（見沼地区）

ゴイゴイという音は竜の歩く音だったので、見沼の竜を「見沼のゴイ」といった。

⑰慈恩寺の人身御供（岩槻区慈恩寺/慈恩寺沼）

慈恩寺沼の主の竜は村の女の子を人身御供に求めるが、娘を差し出したら戻ってこないと、村人たちが知恵を絞り、娘の代わりにわら人形を差し出した。

別紙資料１の見沼の伝承の位置図（伝承地図）の図の塗りつぶし部分の区域が、見沼田んぼといわれているところである。見沼田んぼは首都圏から20～30km圏に位置し、さいたま市と川口市の２市にまたがっている。南北約14km、外周約44km、面積は1,257.5haである。[22] この見沼田んぼの地図の形が、竜の頭の形に似ているとも言われている。見沼田んぼの地形付近には、竜、蛇その他水辺に関する伝承が多くみられることがわかる。「④弁天様のお使い」では、南区別所に別所沼があり、そこに小祠があり弁天様が祀られている。見沼地域とは離れているが沼と関係がある。「⑤長伝寺の水呑み竜」や「⑰慈恩寺の人身御供」について、見沼地域と離れているが、さいたま市の稲作地帯にあり水に関わる話である。

氷川女體神社に伝わる伝説に、片目の鯉と龍燈の話がある。この二つの話は、「明和４年（1767）氷川女体神社由緒書」[23] にも記載されている。

一、見沼ニ片目鯉と申候者明神之鯉にて夥敷在之候、是を取申候者一生盲目に相成候も在之、又ハ一七日にて元のことく明らかに成候者も有之、諸人殊之外相恐候義ニ御座候、尤新田ニ相成候時分沼水不残切落し候得共、右之片目鯉一本も無御座尚以相恐候義ニ御座候

一、右湖水御旅所より社頭江大神事前毎年両三度宛龍灯上り申候事従古爾今かハらす、新田ニ相成候而も少シ相残り溜りより右龍灯上り申候、尤日限時刻者定り無之候

由緒書からみられる話は、一つは、片目の鯉が神事を行う沼に多く生息しており、その鯉を獲った者は盲目になる、または17日後には目が見えるようになった者もいる、新田開発の際に沼の水を切り落としたとき、片目の鯉は一匹も出てこなかったという話である。もう一つは、龍灯というもので、いつごろからかわからないが神事を行う沼に、毎年神事の前に灯りが現れる、新田開発により沼の水が干上がったが少しの水溜りからでも灯りが上がることがあり、日時は決まってないという。また、この由緒書には人々がその事象に恐れていたことがうかがえ、神社や沼に関わる信仰に畏怖の念をもっていたことがわかる。また、韮塚一三郎編著『埼玉県伝説集成』に、「龍燈杉」[24] という話があり氷川女體神社の杉の木に龍燈が上がるというもので、由緒書にある龍燈が上がるとう意味は、神社の社頭にある杉の木に上がるというものだとしている。この神社の龍燈は沼から龍燈が現れ移動して、神社の社頭にある杉の木の上に移動するというものであろう

か。片目に関しては、御祭神である奇稲田姫[25]は、ある時闘いで傷ついて片目になってしまったという話もある。

国昌寺の僧文龍の名や、寺門の装飾された竜の彫刻から、竜との関係を連想されやすい。氷川女體神社には龍燈という不思議な現象や御祭神にまつわる片目の由来や、片目の鯉の話など、また、見沼田んぼ地域にも竜に関する伝承が多く点在している。こういう伝承が人々の生活と結びついて、信仰と共に共存し、人々の郷土に興味を持ち続けさせているのである。

竜神の伝承は、埼玉県内に雨乞いの神[26]として伝えられている。その伝承が残っているのは見沼地域では川口市赤山、さいたま市南区別所、埼玉県内では飯能市南川字久通、飯能市南字飛村、入間郡鶴ヶ島町足折、入間郡名栗村、比企郡滑川村羽尾、秩父市宮地、秩父郡長瀞町、秩父郡皆野町、秩父郡荒川村、児玉郡児玉町宮内、熊谷市熊谷、熊谷市佐谷田、熊谷市代諏訪神社、深谷市上増田　諏訪神社、寄居町関山、大里郡花園村小前田、熊谷市上之　竜渕寺などがある。韮塚は、竜は想像上の水神とし、古くからワニ、カメ、竜、蛇、ウナギ、魚、ときに猿、カワウソ、クモの形をとると信じられているとしている。伝承が一般化したのは鎌倉時代頃で、平安期に大陸文化が大量に輸入されたからだとしている。建暦元年（1211）7月人々が大洪水に悲嘆している時に、源実朝が「時により過ぐれば民のなげきなり、八大竜王雨やめたまへ」と神に献じて祈ったことによって、竜神に雨を求めたり、水災害から守護してもらうことが盛んになったのだろうとしている。

見沼地域の伝承に関して、弁天様に関する伝承では、人間の前では蛇の姿で現れるが、実は竜神は祠で祀られている。見沼という水辺の地形に生息する蛇や虫、想像上の動物が多く伝承にあり、多くは竜神の化身ではないかと考える傾向がみえる。「見沼の笛」の伝承では、人々が笛の主はおそらく見沼の竜神の化身ではないかとうわさし合ったと伝えている。竜神に関して韮塚は、「日本では水の神を女体とすることは、古くかつひろい俗信であった。」と注に記し、「竜神が物愛で色々の物を欲しがる思想は古くからあった。欲しがるものには、弓、箭、太刀、刀、鎧、腹巻、鐘などの他に人間（特に美人）があった。」と解説している。慈恩寺の人身御供の話は、実際に人身御供が行われたかどうかは別の機会に考察することを委ねたい。韮塚は柳田國男の言葉[27]を次のように引用している。要約すると「特殊な神主が、人と神との仲をに立って意思疎通をするために、農業

にとって一番利害関係の大きい水の神の祭に、飲食以外の方法で神の心を和らげ申すという思想が残っていたらしい。」である。氷川女體神社では見沼を神事の場として御座船に神輿を乗せ供物を奉納し見沼の神に対して祭祀[28]が行われていて、人身御供は行われてはいない。享保年間の８代将軍吉宗の見沼干拓事業により御手洗瀬として神事を行っていた沼がなくなったことは、神社にとって経済的にも信仰の面でも存続を危ぶまれる深刻な問題が発生した。これ以降に生まれた伝承には、万年寺に逗留していた干拓工事に携わっていた井沢弥惣兵衛に、竜神の化身が美女となって懇願する話である。以上述べたことから見沼の伝承は、中世のころから存在したと考えてよいのではないかと思われる。人々は、中世のころは神仏に畏怖の念を抱き、不思議な現象に畏れを抱いていたが、江戸時代の干拓工事以降は、住処を失った竜神に対して悲哀を寄せている人々の思いが伝承から感じられる。そういう地域の人々の生活の中に息づく思いが現代の人々にも継承され、市町村合併に伴う地域を共存するうえで、共通意識を呼びかけたのである。

Ⅴ　竜神行列（祭り）の起こり

・さいたま竜神まつり会

2000年辰年に「竜神まつり会」が発足した。2001年に３市合併によるさいたま市が生まれるために、地域の融合と新しい市への期待をこめ、地域に語り継がれてきた竜の伝承を新しい姿に再現し、空を舞う竜として「昇天竜」を制作し、日本各地の竜祭りやイベントに参加し、地域交流を深めている。また海外のイベントではホノルルフェスティバル、上海万博等に参加し、さいたま市の国際交流の一翼も担っている。「昇天竜」は、低地であるため沼地として竜神伝説が多くのこされている見沼が、干拓により広大な沼が無くなり、そこに棲む竜神は沼を明け渡し天に昇ったという由来からきている。

・竜神行列のきっかけ（別紙資料２　参照）

さいたま竜神まつり会[29]は、イベントに参加する前に成功と安全祈願のため、氷川女體神社でお祓いを受けるという慣習があった。３市合併にあたり、見沼という地域に語り継がれる竜の伝承と、干拓工事と見沼通船堀という江戸時代の土

木工事の技術の高さなど地域に誇る文化と伝統があり、それを財産とすることに意義があるとした。そして、氷川女體神社の祇園磐船龍神祭と国昌寺の竜の伝承を関連させ、さいたま竜神まつり会のイベントとしたのが発端である。

・竜神行列の次第

12:00　国昌寺　出発儀式

山門の前で、住職が経を上げる。

国昌寺の山門を開けて竜神行列が出発。

後ろに市民を引き連れ、宿ふじ会 の竜とさいたま竜神まつり会の竜が出発（行列のルートは別紙資料１を参照）

見沼田んぼの田園地帯である見沼代用水東縁から見沼大橋を通って氷川女體神社まで二つの団体が担ぎながら行く。

（途中、藁で制作された龍のオブジェ（NPO法人エコエコ制作[31]）に立ち寄り、見学）

氷川女體神社に到着後、境内で待機

15:00　氷川女體神社　祇園磐船祭開始

宮司、神職、巫女、氏子代表、その他崇敬者が神社から祭祀場へ向かう。

祭祀場に到着

来賓の挨拶（奉賛会会長・さいたま市教育委員会文化財保護課長）

祭員の紹介（宮司・禰宜・権禰宜）

祭式（修祓・宮司一拝・献饌・祝詞・四方祓い・巫女舞（朝日舞・豊栄舞）・通船堀舟歌[32]・彩の宮太鼓[33]・玉串奉奠・撤饌・昇神の儀・宮司一拝・宮司挨拶）

祭祀場を祭員一同、氏子崇敬者、竜神行列関係者、一般市民と共に一周する。

神社へ帰着後、関係者全員で記念撮影

終了

＊竜神行列のルートは資料１を参照。竜神行列の様子は、資料３を参照

・見沼田んぼの歴史

見沼田んぼの歴史を振り返ると、この地域は古代は海面より低く東京湾の入り

江であった。その後、約6000年前に海が後退し入り江が東京湾と分離し、高低差のある洪積台地と沖積低地をつくり、舌状台地と樹枝状の谷という景観ができた。さいたま市は大宮台地と沖積地からなり、見沼は低地に属し沼や湿地が多い地帯となった。江戸時代初期（寛永６年（1629））に水田に農業用水を供給するため灌漑用水として、見沼溜井が伊奈忠治によってつくられた。その後享保12年（1727）に、土木技術者である井沢弥惣兵衛により新田開発のため見沼溜井を干拓し見沼田んぼができた。

その後、見沼溜井の代わりに農業用水を確保するために、西縁と東縁の台地にそって見沼代用水がつくられた。見沼通船堀は（享保16（1731））、その東西の代用水と芝川を結び、江戸との舟運を開けさせ、物流を活発にした。1950年代の高度経済成長期までの長い間、稲作を中心に農業生産地であった。

高度経済成長期に土地開発がさかんに行われ、農地が土地利用へ転換されるようになった。昭和33年（1958）の狩野川台風により芝川下流の川口市街地に被害を及ぼしたが、見沼田んぼに湛水したことにより下流の被害が抑えられたことに注目し、昭和40年（1965）に宅地化を認めないとする「見沼三原則」という制定された。1970年代の米の生産調整から水田が畑地へと転換が始まり、著しい社会変動による都市化が進み見沼田んぼの環境が変化した。1995年に新たな土地利用の基準として「見沼田圃の保全・活用・創造」が策定され、緑地空間の保全のため公有地化推進事業が始まった。

・市民意識調査[34][35]

現代の見沼地域に行政の配慮がみられ、さらに2000年という新しい時代に新しい市ができるという期待感をもったのは、竜神まつり会のような一部の市民だけであろうか。『浦和市市民意識調査報告書』では、調査時期は平成８年２月５日～10日、浦和市居住の20歳以上の男女、無作為抽出の3000人を対象に３市合併と政令都市について調査が行われた。『さいたま市総合振興計画策定のための市民意識調査報告書』では、政令都市へ移行することを視野に、市民の意識を把握し今後の計画づくりに活用していくため、意識調査が行われた。調査時期は、平成13年（2001）11月中旬から下旬、さいたま市居住の20歳以上の男女約10000人を無作為抽出した。調査方法は、郵送による調査票の配布と回収である。合併前の意識調査[36]によると、三市（浦和市・大宮市・与野市）による合併し政令指定

都市を目指していることに対する調査であり、合併に賛成か反対か、政令都市に賛成か反対をアンケートで調査したものであった。政令指定都市化についての意向調査では目指すことの賛成派が高い割合となった。しかし合併する市との関連を考慮すると、政令指定都市化に対する条件を示しつつ賛成する推進派が潜在的に多かった。新しく生まれる市に対する行政面や産業・環境・教育等についての市民の期待度は、非常に高いとはいえない。

合併後の調査[37]では、さいたま市のイメージとして「発展的で、自然が豊か」というイメージをもっている人が多い。また今後も快適で自然の豊かな環境を望む声が多い。首都圏に近いが、豊かな自然が残され公害が少ないことを評価されている。また地域活動については、町内会や自治会、子ども会などについて参加している人は、34.8％で、今後の参加意向は26.4％と現状の参加率より低い。ボランテイア活動については、参加率は9.5％であるが、今後の参加意向は30.6%と高くなっていると報告されている。

市民のもつ新しく生まれたさいたま市のイメージは、都心に近いが自然の豊かな環境をもっていることと、環境保全に理解が高いといえる。しかし、居住する地域に対して現実的な社会参加は低いが、参加したいという意向はもっていることがうかがえる。市民の有志から結成された竜神行列が氷川女體神社と国昌寺を結び竜神まつりとして認識されているが、新しく生まれた地域市民がどのように関わるかが、祭りの発展に今後注目される。

Ⅵ　結論

祭りを検討してみると、祭儀は、氷川女體神社の祇園磐船龍神祭りと国昌寺における開門式であり、祝祭は、竜神行列に相当する。祭儀は、神仏に神霊または仏に共通の祭りの安全と地域の発展の願いを込め、祭儀に参加している間は一同敬虔な態度で臨んでいる。祝祭は、国昌寺から出発して氷川女體神社まで練り歩く竜神行列である。国昌寺の開門と共に２つの団体の竜が勢いよく飛び出してくる。まさに天の駆け昇る竜のようであるかのように、担ぎ手は体制を整え力を合わせ門の外へ竜を担ぎだすのである。その後に参拝者、見学者、地域住民などが後に続いて、行列に自由参加している。薗田の「日常生活にない新鮮さと楽しさを期待して人々が群れ集まり、参加することによって互いに快い興奮と価値観を

味わうことのできる催し」として、竜神行列はある。

薗田は、「現代は故郷喪失の時代という。」[38] と述べている。見沼田んぼは、江戸時代の水田開発から農地を広げ農業生産を高めてきたが、現代の1950年代から始まる高度経済成長期に、社会情勢の変化による大きな土地利用の変革が起こり、見沼の緑地が失われ始めた。台風という自然災害により田圃の果たす機能に気づかされ土地利用の見直しと、さいたま市の首都圏近郊にあるという立地条件により都市化された生活を送る人々に、心の中の風景として描く緑豊かな故郷に思いを起こさせたのである。

また聖と俗のコミュニケーションとしては、寺社がこの竜神行列を行うことに協力体制を取り国昌寺は門を開放し、氷川女體神社で行われる祇園磐船龍神祭に竜神行列をした人々全員は敬虔な面持ちで儀式に参加し、祭りの終盤に祭祀場を巡り祭儀が終了する。寺社と竜神行列の参加者、見学者、参拝者、氏子崇敬者、地域住民とコミュニケーションが成立しているといえる。リーチの祭りの構造としての理論として時間軸を当てはめるならば、この竜神まつりの時間軸は、現在と過去の地域の歴史である。現在と過去の交差している空間に、人々の地域信仰と伝統文化への思いと、現代社会の変化に失われつつある緑豊かな自然への憧憬が、竜神行列がおこり竜神まつりとして成立したのである。

松平は、都市祝祭を「日本の都市の中で展開される祝祭的行為」とし、伝統的都市祝祭「江戸時代後期に形成され、20世紀初頭に完成された凝集的・集団的な社会案的の祝祭…（省略）…つまり近世の伝統のうえに開花しながら、産業化のなかでその基本的性格を体現してきた」[39] と合衆型都市祝祭「伝統とは無縁で不特定多数の個人が自分たちの遺志で選択した、さまざまな縁につながって一時的に結びつき、個人が「合」して「衆」をなし、あるいは「党」「連」「講」などを形成してつくりだす祝祭」[40] 埼玉県秩父本町の秩父神社例大祭、東京都府市の大國魂神社の例大祭をあげ、神社と住民が昔から地域の社会構成をなし、神社の祭礼とその地域の町内（氏子集団）とが共同で行う伝統型都市祝祭と、高円寺阿波踊りを伝統型とは対比的に、地域集団とは無関係に祭礼のために人々が合衆する合衆型都市祝祭と区分をしている。

筆者の考える都市祝祭とは、全国的に知名度のある都市に伝統的な祭祀を行う寺社の祭り、あるいは都市の中で起きた歴史的事柄に、地域住民が地域文化との関連性を見出して祭に付随する祝祭を形成し、祭りを見物に来る観光客を呼び、

その地域に祭りを行うことで商業が活発になり経済効果を生み出すものである。

さいたま市におけるこの竜神まつりは、主催者によると2016年は約75名で、2017年は約200名と増加したが地元の見学者が多く、竜神行列が行われることに関しては知名度が低い。竜神行列を行う団体は、無償と善意で行っており地方行政の財政援助はない。地域の商業関連事業との連携はされていない。よって現在のところ都市祝祭の機能をもっているとは考えにくい。この祭りは、見沼田んぼという行政に管理された緑地地帯の中で行われる祭りで、自然の風景の中に行列するということが特色でもある。この祭りを見学して考えると、竜神まつりは、少子高齢化、個人主義、地域の連帯感の希薄など様々な社会情勢の変化の中で、人々の心に浮かぶ自然回帰、自然との共存、理想的な社会、地域連帯感の回復、地域文化の再発見等を訴えている面をもっている。今後の課題として、この祭りの準備構成や関連している団体の実態調査など、調査対象を広げ具体的な事例をあげられるようにしたい。竜神まつりが、今後どのような展開をしていくのか見守りたい。

注

（1）石井研士『プレステップ神道学』弘文堂 2012年 P.49「祭りには、日常の秩序を維持しようとする祭儀の要素とそうした日常性を徹底的に破壊して聖なる状況下で集団の融合を間座すような祝祭の要素がある。」を参照

（2）倉林正次『神の祭り仏の祭り』佼成出版社 P.47 本居宣長の『古事記伝』巻十八の中で「神を祭るといふも、その神に奉仕るにて本同言なり」と説いている。

（3）薗田稔『祭りの現象学』佼成出版社 1990年 P.49

（4）E・リーチ『人類学再考』青木保・井上兼行訳 思索社 1985年

（5）前掲注2と同じ PP.59−62　祭りを非日常的な位相、つまりある限られた時間と空間の中に日常的現実を離れた特殊な実在の位相が生まれるととらえ、リーチの理論で解説している。

（6）柳田国男2017年『日本の祭』KADOKAWA PP.34−35 筆者は信仰に教典がないゆえに、祭りを通して信仰が受け継がれていくものであると解釈した。

（7）柳田国男2017年『日本の祭』KADOKAWA PP.37−38

（8）松平誠『都市祝祭の社会学』有斐閣　序論 P.2

（9）『古事記』崇神天皇　「天皇御歳壱佰陸拾捌歳（戊寅年十二月崩）」『古事記　上代歌謡』日本古典文学全集1 1990 小学館

『日本書紀』崇神天皇　「天皇践祚六十八年冬十二月戊申朔壬子、崩。」『日本書紀上』日本古典文学大系67 1967 岩波書店

中村啓信訳注『古事記』平成24年（2012）角川文庫→P.119　干支注記の初出　崩御が258年か。

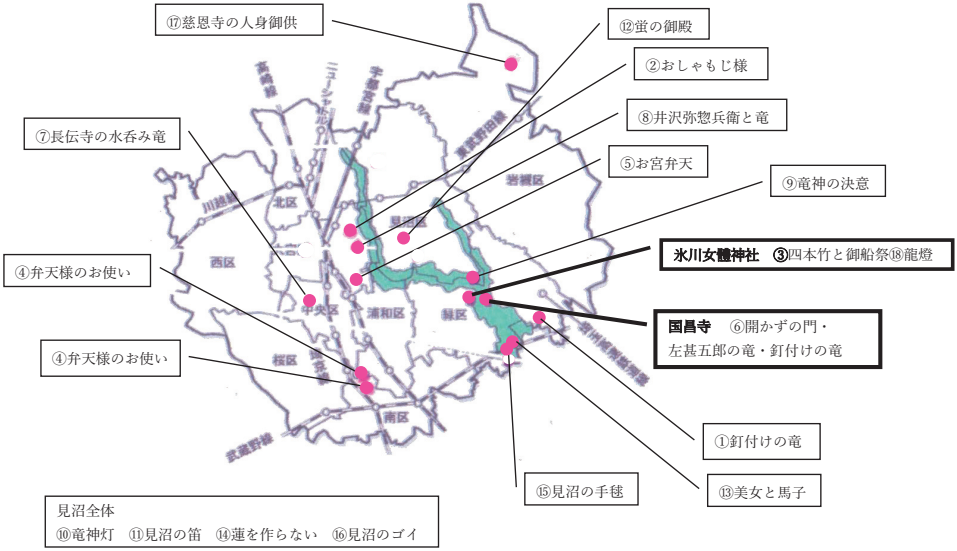
明和4年の神主武笠大学による「氷川女体神社由緒書」に「当社籔川大明神者、人皇十代崇神

帝之御宇御勧請在之、…」とある。
(10) 浦和市総務部市史編さん室編『浦和市史第２巻　古代中世資料編』東京印書館 1978年
浦和市教育委員会編『浦和の文化』東京印書館 1986年
(11) インデックス編集部『訪ねてみたい埼玉のお寺』㈱インデックスインデックス 2006年
国昌寺　冊子「国昌寺」2016年
(12) 浦和市総務部市史編さん室編『浦和市史第３巻　近世史料編Ⅳ』東京印書館 1985年 P.210
(13)『浦和市史第２巻　古代中世史料編』P.160
(14)『浦和市史第３巻　近世史料編Ⅳ』Ⅰ 寺社編
(15)『武蔵国郡村誌』足立郡 P.336
(16)『新編武蔵風土記稿第七巻』P.226
(17)『古事記』には、櫛名田比売とある。
(18)『古事記』には、須佐之男命とある。
(19) 三品彰英『建国神話の諸問題』「出雲神話異伝考」平凡社 PP.26−27 奇稲田姫の章を参照
(20) 石上堅『日本民族大事典』桜楓社 1983年 PP.862−863【伝承】親から子へ、あるいは一集団・一部内族で、無意識をも含めて。文化・生活の受け継がれることをいう。【伝説】いい伝え・いわれのことをいう。伝承と伝説について、本稿では伝説も含めて伝承として表記する。伝説と表記することもある。
(21) さくら草五郎『見沼と竜神ものがたり』さきたま出版会 2008年 PP.30−31
(22)『見沼田圃の保全・活用・創造に向けて』埼玉県さいたま市・川口市
(23) 浦和市総務部市史編さん室編『浦和市史第３巻　近世史料編Ⅳ』東京印書館 1985年 PP.29−31
(24) 韮塚一三郎著編『埼玉県伝説集（別巻）』P.24
(25) 韮塚一三郎著編『埼玉県伝説集（別巻）』P.114
(26) 韮塚一三郎著編『埼玉県伝説集成（下巻・信仰編）』PP.11−33
(27) 韮塚一三郎著編『埼玉県伝説集成（下巻・信仰編）』P.294
(28)『浦和市史第３巻近世史料編Ⅰ』「武蔵国一宮女躰籤川明神諸事控」P.414 武運長や久天下安全の祈祷を行ったとある。
(29) さいたま竜神まつり会　実行委員会委員長　平田利雄氏
(30) 宿ふじ会　代表　田村一好氏
(31) NPO法人エコエコ　http://kaerunomaru.world.coocan.jp/news.htm（2018年９月24日閲覧）
(32) 見沼通船堀舟歌保存会　代表　鈴木甫氏
(33) 彩の宮太鼓　代表　大川信子氏
(34) 上武大学西研究室・浦和市編『浦和市市民意識調査報告書合併・政令指定都市に関する調査）』1996年
(35) さいたま市編『さいたま市総合振興計画策定のための市民意識調査』2002年
(36) 前掲注34と同じ
(37) 前掲注35と同じ
(38) 前掲注３と同じ　P.42
(39) 前掲注８と同じ　P.4
(40) 前掲注８と同じ　P.4

【別紙資料１】

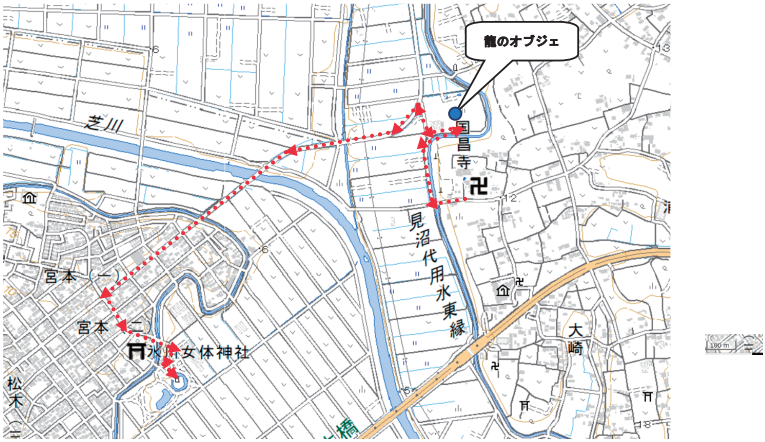
○見沼の伝承の位置図

※図はさいたま市『見沼たんぼ見どころガイドブック 2017』を参照



○竜神行列のルート

参照：国土地理院 https://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do#1



【別紙資料２】

○さいたま竜神まつり会　略歴　（さいたま竜神まつり会の取材と資料をもとに作成）

年号	さいたま市	さいたま竜神まつり会
2000		辰年にかけて、竜神まつり会が発足 巨大昇天竜を発足
2001. 5	大宮・与野・浦和の3市が合併 さいたま市の誕生	「見沼竜神まつり」の開催
2001.10		「埼玉スタジアム」こけら落としに参加 さいたま市誕生記念式典に参加
2002. 5		「さいたま見沼竜神まつり」を開催（以降毎年開催） 大崎公園（緑区大崎）・市民の森（大宮区）・バラのまちフェスティバル（中央区与野公園）など市内各地で昇天竜を搭乗させる 市内の竜神伝説を巡るウォークラリーを実施（以降毎年開催） これを機に「さいたま竜神まつり会」と改称
2003. 4	政令指定都市	
2003. 6		庄和町「龍譚祭」に参加
2003.10		第1回さいたま市民まつり「咲いたまつり」に参加（以降毎年参加） 全国各地に声をかけ、竜サミットを開催（中央区・さいたま新都心）
2004. 3		第10回ホノルル・フェスティバルに招聘され参加。奨励賞を受賞（以降毎年招聘、参加）
2004. 8		「たいしたもん蛇まつり」（新潟県関川村）に招聘され参加
2005. 1		さいたま市成人式に参加
2005. 4	岩槻市がさいたま市と合併し、岩槻区となる。	
2005. 5		氷川女體神社の「祇園磐船龍神祭」に参加（以降毎年参加）
2006. 7		「人形のまち岩槻まつり」に参加
2007.10	さいたま市のイメージキャラクターつなが竜「ヌゥ」が登場	
2008	さいたま市の人口120万人 面積217.49km^2	人口の120にちなんで、長さ120メートル超の巨大昇天竜を製作（全長125ｍ）
2008.10		咲いたまつり・日本のまつりThe ＭＡＴＳＵＲＩサミットに参加

【別紙資料３】

①国昌寺においての開門儀式（撮影者：筆者　2017年5月4日）

③氷川女體神社までの竜神行列の様子（撮影者：筆者　2017年5月4日）

②国昌寺から竜神行列の出発（撮影者：筆者　2017年5月4日）

④氷川女體神社での竜神行列の様子（撮影者：筆者　2017年5月4日）